

つじ もと まさ ひろ
辻 本 昌 弘

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第88号
学位授与年月日	平成12年2月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 心理学専攻
学位論文題目	移民の共同態編成に関する社会心理学研究 ——沖縄系ボリビア移民の南米と日本における展開——
論文審査委員	(主査) 教授 大橋 英 寿 教授 畑 山 俊 輝 教授 仁 平 義 明 教授 大 淵 憲 一 教授 嶋 陸奥彦 助教授 行 場 次 朗

論文内容の要旨

本論文は、人の移動現象に社会心理学の立場からアプローチしたものである。対象は、戦後の沖縄からボリビア共和国に移住し「オキナワ移住地」をつくりあげた人々である。入植者の多くが1960年代から70年代にかけて隣国の都市ブエノスアイレスとサンパウロへ移動した。また1980年代以降は、オキナワ移住地、サンパウロ、ブエノスアイレスから日本への出稼ぎが生じた。このような移動の結果、南米各地と日本を結ぶ移動ネットワークが現出し、移動先では互助集団がつくられている。この南米各地と日本へ広がった移動の展開が本論文の研究枠組みである。

フィールド調査は、1994年から1998年にかけて南米各地と日本で断続的に行った。本論文では、オキナワ移住地出身者の歴史的展開を叙述しつつ、以下の三つの研究課題について検討した。①民族のカテゴリーの機能、②民族のアイデンティティの変容過程、③移民の共同態編成である。本論文は、以下に要約する7つの章からなる。

第一章では三つの研究課題を詳述し、本研究の意義を示した。

①民族のカテゴリーの機能：民族のカテゴリーとは人を分類するために用いられる名義的カテゴリーである。まず、民族のカテゴリーの基底にあるメカニズムとして、カテゴリー化が環境刺激の低減という認知作用をもつこと、それに関連して多民族状況下では階級などよりも民族のカテゴリーを用いた人の分類が利用しやすいという知見があることを述べた。しかし、それだけではフィールド場面における民族のカテゴリーの動態を理解することはできない。本研究では、そのような認知作用を前提としたうえで、民族のカテゴリーの手段性・機能性を検討する。

②民族のアイデンティティの変容過程：民族のアイデンティティは、民族のカテゴリーを用いて構築される。民族のアイデンティティの変容過程に関する社会心理学的研究の一つに発達段階モデルがある。一方、そのようなモデルが不適切であることを示す知見も提出されている。これらの諸研究を概観して、民族のカテゴリーをめぐる自己-他者関係に焦点をあてて民族のアイデンティティを解明する必要性を指摘した。そのために本研究では、移動前から移動後にいたる民族のアイデンティティの変容過程を、民族のカテゴリーをめぐる自他関係に着目して検討する。

③移民の共同態編成：移民は移動に際して情報交換を行い、移動先には頼るべき人物がおり、人材リクルートを行う斡旋者が活躍する。隣接領域の先行研究を概観して、移動ネットワークの分析単位として〈情報交換関係〉、〈頼る-頼られる関係〉、〈人材リクルート制度〉、〈インフォーマルな研修制度〉を設定した。さらに移動先では経済的講集団や同業者組合などの移民集団が作られる。これらの移動ネットワークや移民集団を本研究では「共同態」と総称する。本研究では、共同態を社会的資源と捉えたうえで、移動の際に果たす機能を検討する。

また、移民の共同態が経済的機能を果たす場合には、「エスニックな資源」として概念化されてきた。しかし、移民の共同態であっても出自が成員の結合原理になっているとは即断できない。本研究では、移民の共同態の結合原理が出自などの匿名的な集団成員性 (group membership) によるのか、あるいは対面的な個人関係 (interpersonal relationship) によるのかも併せて検討する。

第二章では、沖縄系ボリビア移民の歴史的展開の全体動向を示した。

まず、戦後の沖縄から移民が送出された背景を説明した。敗戦後の沖縄では海外引揚げ者による人口過剰が発生していた。さらに当時の沖縄では米国の強権支配が行われ、一方、ボリビア在住の沖縄系戦前移民が移住実現のために尽力した。かくして、1954年から1964年にかけて約3200名がボリビア共和国の東部熱帯平原に入植し、「オキナワ移住地」を作り上げた。しかし、オキナワ移住地は1960年代に度重なる水害や旱魃に見舞われた。1970年代には換金作物導入が失敗し、移住者は大きな負債を抱えた。また営農の大規模化が不可欠であるために、オキナワ移住地は恒常的に過剰人口を排出せざるをえない構造的必然性をもっていた。

このような状況下での人口流出を統計資料により示した。1960年代から70年代にかけて入植者の約八割が転出した。主要な移動先は隣国の都市サンパウロとブエノスアイレスだった。約一千名がサンパウロに移動し、約六百名がブエノスアイレスに移動した。さらに1980年代には日本の好景気に対応して日本出稼ぎが発生した。

次に、オキナワ移住地から転出する際に利用された対人資源について面接調査結果を示した。移動初期には多様な対人資源が利用されるが、移動先にオキナワ移住地出身者が増加するにつれて、家族・親族を頼る移動に収斂していった。

第三章では、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスにおけるオキナワ移住地出身者の展開を詳述した。

まず、初期適応段階における職種選択について検討した。ブエノスアイレスにおける日系人の生業は戦前よりクリーニング店が中心で、女性の一部には美容室経営がみられる。オキナワ移住地出身者がクリーニング店や美容室の技術を習得する過程には同郷者のインフォーマルな研修制度が存在していた。そのようなインフォーマルな研修制度の存在により、オキナワ移住地出身者は短期間で生業技術を身につけることができ、さらに特定職種への集中が生じた。

次に、経済的適応過程と講集団の関連について分析した。まず、講システムのシミュレーションを行い、その特徴として、①発起人救済組織であること、②金融組織としての合理性をもつこと、③組織が脆弱であることを指摘した。その上でオキナワ移住地出身者の経済的適応過程を生業形態変化に即して三期に区分し、各期における経済的講集団の有効性と限界について考察した。第一期（1960年代～70年代）においては講集団が有効に機能し、当初は無資本だった移住者が三年前後の短期間で自営業経営者として独立することを可能にした。第二期（1980年代）においては、ハイパー・インフレーションにより講集団の有効性はなくなり、むしろ債務不履行者の続出など社会的混乱を日系人の間に惹起させた。それが日本出稼ぎの契機になった。第三期（1990年代）においては、不況のために、講集団は資本調達組織ではなく親睦組織

として維持されている。このような歴史的展開を確認したうえで、経済的講集団の事例研究を行った。構成員の属性や加入資格を検討し、構成員の結合原理を明らかにした。

さらに、オキナワ移住地出身者が結成した親睦団体の盛衰を跡づけた。親睦団体活動への参与観察と面接調査の知見から、親睦団体活動で表出される民族的アイデンティティと加入資格について明らかにした。以上を踏まえて、親睦団体と経済的講集団の加入資格を比較し、移民集団の機能差と加入資格の関係について考察した。親睦団体は出自が結合原理となっていた。その一方、経済的講集団は「日本人」や「沖縄出身」というような出自にもとづく相互扶助ではなく、個人関係にもとづく信頼性により組織されていることを指摘した。

また、アルゼンチン社会における民族的カテゴリーの動態について分析した。アルゼンチンは欧州系移民が人口の97%を占め、日系人は日常的に「皮膚の色」を標識にした出自確認を迫られている。そして、日本人移民への肯定的ステレオタイプ、他のアジア系移民への偏見が流布しており、両者は標識としての「皮膚の色」を共有している。このことを背景にして、日系人が民族的カテゴリーを用いた自己呈示を自営業経営で利用していることを明らかにした。

第四章では、ブラジルのサンパウロにおけるオキナワ移住地出身者の展開を、共同研究者の成果も引用しながら記述した。サンパウロ市内のカロン地区に約一千名の日系人が居住している。まずオキナワ移住地出身者がカロン地区に流入した経緯を跡づけた。

次に、経済的適応過程の分析を行った。カロン地区における日系人の主生業は縫製業である。オキナワ移住地出身者の職種分布とその変化を示し、縫製業を中心としつつ職種の多様化と日本出稼ぎが生じていることを明らかにした。そして、縫製業と近年に現れてきた新職種の特徴を分析した。また、サンパウロのオキナワ移住地出身者には大規模経営を行う成功者がでてくる。このような社会上昇が実現された経緯を、経済的講集団、日系人コミュニティ内での分業体制などに触れながら考察した。

第三章、第四章をふまえて、ブラジルとアルゼンチンにおけるオキナワ移住地出身者の経済的適応過程を比較した。ともに最初は社会的資源を剥奪された状況から異郷での都市生活を開始した。初期段階における経済的講集団の有効利用も共通している。しかし、アルゼンチンでは、クリーニング店相互の過当競争を避けるために日系人コミュニティの形成が意図的に避けられた。また、職種の特性から一店舗以上の事業拡大は困難であった。しかし、サンパウロの縫製業という職種では、日系人コミュニティを形成すること自体が有利な条件を作り出した。コミュニティ全体が縫製業に特化して分業体制が整備された。それが日系人縫製業の競争力を強化し、資本蓄積を実現した。

第五章では、1980年代以降の、オキナワ移住地出身者の日本出稼ぎについて詳述した。

オキナワ移住地からの日本出稼ぎは1980年代初頭から北関東と神奈川一帯で展開した。初期に北関東と神奈川に定着した出稼ぎ体験者への面接調査から、南米と日本を結ぶ移動ネットワークが形成された経緯、さらに日本滞在者相互で情報交換を行うことにより特定工場にオキナワ移住地出身者が集中した経緯を報告した。

1980年代後半には横浜市鶴見一帯に日系人が集中した。この地域の特色は、日本企業に雇用されるのではなく、自ら会社を設立する日系企業家が出現していることである。この地域に日系人が集中する過程では、オキナワ移住地出身者が経営する旅行社、鶴見在住の沖縄県人が経営する自営業が大きな役割を果たした。この二つの主体が結びつくことにより、南米と日本を結ぶ移動ネットワークが作り上げられた。さらに沖縄県人の自営業で技術を習得したオキナワ移住地出身者が独立していくというインフォーマルな研修制度が存在していた。独立した日系企業家達は南米各地から日系人労働者をリクルートし、鶴見への日系人集中を生じさせた。オキナワ移住地出身の企業家は日本語とスペイン語の両方を話すことができ、南米日系人と日本社会の媒介者としての役割を担っている。以上のような過程において利用された移動ネットワークの各側面は、固定的な出自にもとづく相互扶助として説明できるものではなく、各主体が合理的な判断のもとに有効な対人資源を選択していることを指摘した。

オキナワ移住地出身者が経営するのは、建設業の一種である電設業である。建設業界には重層的下請構造が成立しており、その末端に位置する日系電設業は労働力需給調整としての役割を担わされている。日系企業家は重層的下請構造から生じる様々な矛盾に直面しているが、それに対して日系企業家相互で経済的講集団を組織して日常生活のなかから対抗手段を創造している。

さらに労働現場での参与観察から日系人の労働過程を素描した。1990年代における不況の深刻化とともに民族のカテゴリーを用いた日系人労働者の選別が行われている。それに対して日系人労働者は労働現場と私生活領域での自己呈示を使い分けて対処していることを考察した。

第六章では、オキナワ移住地で生育し、青年期に日本へ出稼ぎに行く日系二世について詳述した。

まず、二世が生育するオキナワ移住地の多民族状況について記述した。アンデス高地から下山してきた先住民やメスティーソがオキナワ移住地に流入した経緯に触れたうえで、オキナワ移住地では日系人とボリビア人が相対的自立性を保っていることを示した。移住地内では、日系人とボリビア人は別居住区に暮らす。また両集団の経済格差が存在する。

さらに、各集団は民族のカテゴリーにより分類され、ステレオタイプの相互付与が発生して

いることを報告した。日系人は、一世だけでなく二世も含めて、ボリビア社会から「日本人」あるいは「外国人」としてカテゴリー化されている。

次に、このような多民族状況と1980年代以降の日本出稼ぎが日系二世の社会化過程に与えている影響を、日系人中学生とボリビア人中学生に実施した質問紙調査から概観した。対人関係、将来展望などを示しながら、日系人中学生とボリビア人中学生の社会化過程を比較した。同じ学校に通学しているにも関わらず、日系人中学生の社会化過程はボリビア人中学生とは大きく異なっており、日本社会の強い影響があらわれていた。

以上を踏まえたうえで、日系二世がボリビアで構築する民族的アイデンティティと、それが日本体験により変容していく過程を面接調査結果から考察した。日本に行くまでは「血筋」にもとづいて民族的アイデンティティを構築する。代表的なものは「日本人の子供は日本人」というアイデンティティ構築である。それは「日本人」あるいは「外国人」としてボリビア社会からカテゴリー化されることとも整合的である。「ボリビアで生まれたからボリビア人」という見方も持っているが、上に述べたようなオキナワ移住地の状況下で自己を意味づけるのには有効性をもたない。しかし日本に行くと、日本社会から「外国人」としてカテゴリー化される。それが、移動前の「日本人」としての民族的アイデンティティと齟齬をおこし、民族的アイデンティティの再構築が行われていた。再構築された民族的アイデンティティの内実は、各人の将来展望や配偶者などにより多様であり、個性化が生じていた。

第七章では、第二章から六章までの知見について総合的考察を行うとともに、今後の課題について述べた。

民族的カテゴリーの使用に機能性が現れるのは、マジョリティが経済行動にリンクさせて民族的カテゴリーを執行する場面であった。アルゼンチンにおける自営業経営でみられた民族的カテゴリーの使用は、マジョリティ社会のカテゴリー化への対処行動という側面がある。日本では不況の深刻化とともに、民族的カテゴリーを用いた日系人労働者の選別が行われ、それに日系人労働者は対処していた。

民族的アイデンティティの解体・再構築の契機となるのは、移動によるマジョリティ社会が執行するカテゴリー化の変化だった。マジョリティ社会のカテゴリー化の変化が民族的アイデンティティに強い影響を与えるのは、それが集合的なものであり、個人がそれを拒否したり変更したりすることが容易でないからである。

民族的カテゴリーにおいても民族的アイデンティティにおいても、マジョリティ社会のカテゴリー化が大きな役割を果たしていた。しかし、これらのカテゴリー化は集合的であるがゆえに、厳密に捉えるのが難しい。今後は、その集合的な作用を分析できる研究手法が必要である

ことを指摘した。

また、各展開にみられた移民の共同態について考察した。移動時に利用された対人資源や経済的講集団は、対面的な個人関係を結合原理としていた。その一方で、異郷の地でのインフォーマルな研修制度や人材リクルート制度には、出自的な面もみられた。しかし、その場合でも固定的な出自にもとづく互助活動ではなく、自己の多元的な出自から有効なレベルを選択し、そこからネットワークや集団を創造していた。出自による相互扶助というだけでは現象の説明になっていない。移民は、社会的資源が剥奪された状況に対処するために共同態を編成する。今後は、異郷の地で生き抜くという観点から、共同態を創造する<過程>を解明することが重要であることを指摘した。

論文審査結果の要旨

本論文は、南米ボリビア共和国に戦後創設されたオキナワ移住地への移住者とその二世のアルゼンチン、ブラジルへの再移住、さらに日本への出稼ぎ移動現象を対象にして、多民族状況下の民族的カテゴリーの機能、民族的アイデンティティの変容、移民の共同態編成について社会心理学の立場からアプローチした成果の集成である。7章で構成されている。

第一章「課題」では研究課題を3点に集約する。第1は民族的カテゴリーの機能で、カテゴリー化の認知作用とともにその手段性・機能性に注目する。第2は民族的アイデンティティの変容過程で、自己-他者関係に焦点をあてて解明しようとする。第3の課題、移民の共同態編成では、移動ネットワークと経済的講集団に注目し、移動ネットワークの切り口として「情報交換関係」「頼る-頼られる関係」「人材リクルート制度」「インフォーマルな研修制度」を設定する。

第二章「オキナワ移住地と移動ネットワーク」では、沖縄系ボリビア移民の40年間の歴史的展開が概説される。戦後の沖縄から移民が送出された背景、約3200名がボリビア共和国の東部熱帯平原に入植して「オキナワ移住地」を作り上げた経緯、入植者の8割が転出を余儀なくされた自然・経済条件をたどり、アルゼンチン、ブラジルへの再移住、その後の日本への出稼ぎの必然性と、そこで活用された多様な対人資源を分析している。

第三章「アルゼンチンにおける展開」では首都ブエノスアイレスにおけるオキナワ移住地出身者の展開を跡づける。初期適応段階でクリーニング店に職種が集中した背景要因として、同郷先行移民のネットワークとインフォーマルな研修制度による技術習得の容易さをあげ、つづいて経済的適応過程と経済的講集団の関連を分析する。経済的適応過程を生業形態の変化に即

して三期に区分し、各時期における経済的講集団「模合」の有効性と限界を明らかにする。さらに親睦団体活動の盛衰が綿密な事例研究をもとに考察され、親睦団体が出自を結合原理とするのに対し、経済的講集団は個人関係にもとづく信頼性により組織されていることを指摘する。欧州系移民が圧倒的マジョリティであるアルゼンチン社会での民族的カテゴリーの動態分析から、日系人は日常的に「皮膚の色」を標識にした出自確認を迫られ、日本人移民への肯定的ステレオタイプ、他のアジア系移民への偏見が流布している構造の中で、日系人が民族的カテゴリーを用いた自己呈示を自営業経営で利用していることを明らかにしている。

第四章「ブラジルにおける展開」では、オキナワ移住地出身者がサンパウロ市のカロン地区へ流入した経緯と経済的適応過程を追跡している。移動初期の縫製業への集中から職種の多様化へ、さらに日本出稼ぎが生じてくる様態を明らかにした上で、オキナワ移住地出身者に縫製業の大規模経営成功者が続出してくる経緯を、経済的講集団、日系人コミュニティ内での分業体制などから考察する。以上をふまえて、ブラジルとアルゼンチンにおけるオキナワ移住地出身者の経済的適応過程が比較される。社会的資源を剥奪された初期段階における経済的講集団の有効利用は共通しているが、アルゼンチンでは日系クリーニング店相互の過当競争を避けるために日系人コミュニティの形成が意図的に避けられたのに対し、サンパウロでの縫製業という職種は日系人コミュニティが形成される条件をつくりだし、コミュニティ全体が縫製業に特化して分業体制が整備され、日系人縫製業の競争力を強化し資本蓄積を実現したとする。

第五章「日本における展開」では、アルゼンチンやブラジル再移住者も巻き込んだオキナワ移住地出身者の1980年代以降の日本出稼ぎの動態が詳述される。南米と日本を結ぶ移動ネットワークの形成過程、日本滞在者相互の情報交換により、北関東と神奈川、とくに横浜市鶴見地区一帯にオキナワ移住地出身者が集中してくる経緯が明らかにされる。この地域のオキナワ移住地出身者の特色は、日本企業に雇用されるだけでなく、自ら会社を設立する日系企業家が出現していることにあるが、この実現には電設業のインフォーマルな研修制度、日系人労働者の人材リクルート制度が寄与していることを豊富なデータで跡づける。オキナワ移住地出身者の経営する電設業は重層的下請構造をもつ建設業界の末端に位置して労働力需給調整の役割を担うが、日系企業家は相互に経済的講集団を組織して対抗手段を創造している。日本社会からの民族的カテゴリーを用いた労働者の選別に対して、日系人労働者は労働現場と私生活領域での自己呈示を使い分けて対処している実態を労働現場での参与観察をもとに明らかにしている。

第六章「日系二世の社会化過程と民族的アイデンティティ」は、オキナワ移住地で生育し、青年期に日本へ出稼ぎに行く日系二世についての事例研究である。オキナワ移住地では日系人とボリビア人が相対的自立性を保ち、各集団は民族的カテゴリーにより分類されステレオタイ

プの相互付与が発生し、日系人はボリビア社会から「日本人」としてカテゴリー化されている。まず、対人関係、将来展望などに注目して日系人中学生とボリビア人中学生を比較することにより、多民族状況下における社会化過程を検討する。つづいて日系二世がボリビアで構築する民族的アイデンティティが日本体験によって変容していく過程について事例研究をおこなう。移住地ではボリビア人との対比から「日本人」アイデンティティが保持されることが多い。しかし、日本においては外国人とみなされることにより民族的アイデンティティの再構築を迫られ、「日系人」あるいは「ボリビア人」アイデンティティが生じてくる。この過程が多数の事例研究を通して明らかにされている。

第七章「総合的考察」で強調されるのは、マジョリティが経済行動にリンクさせて民族的カテゴリーを執行する場面で民族的カテゴリーの使用に機能性が現れること、民族的カテゴリーの使用はマジョリティ社会のカテゴリー化への対処行動という側面をもつことである。民族的アイデンティティの解体・再構築の契機となるのは、マジョリティ社会が執行するカテゴリー化の変化だとする。移民の共同態についての考察では、移動時に利用された対人資源や経済的講集団は対面的な個人関係を結合原理とするが、異郷の地でのインフォーマルな研修制度や人材リクルート制度には出自的な面がみられる。その場合でも固定的な出自にもとづく互助活動ではなく、自己の多元的な出自から有効なレベルを選択し、そこからネットワークや集団を創造していく。社会的資源が剥奪された状況に対処するために移民は共同態を編成するとの結論を導く。

以上のように本研究は、国境を幾度も越えて集合離散する沖縄系移民の40年におよぶ共同態編成の変遷、生活ストラテジーの模索、民族的アイデンティティの変容を、ボリビア、アルゼンチン、ブラジル、そして日本でのフィールドワークを通して丹念に追跡している。これらの課題へ社会心理学からアプローチする際の視点が明示されており、さらに課題に応じて、観察法、面接法、質問紙法、統計資料を自在に駆使した事例研究と全体動向の把握は説得力をもつ。とりわけ、日本への出稼ぎ青年層が多数就労する電設業の工事現場で共に働いて得られた参与観察の知見は、アンケートなどの通常的手法では把握の困難な深い洞察に満ちており貴重である。調査対象は限られ、収集データに疎密はあるが、労働力移動が加速的に進行する一方で民族間の摩擦が多発する現代国際社会にあつて、対象へ密着して収集した本研究の成果は研究スタンスとともに高く評価できる。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有すると認められる。